

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	美山, 良夫(Miyama, Yoshio)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2010
Jtitle	Booklet Vol.18, (2010.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000018-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

福澤諭吉は、「国光発於美術」（国の光は美術に発する）と記した書幅を残した。ここでいう美術は造形芸術に限らず、往時の用語法から芸術全般をさしていると考えられ、慶應義塾創立 150 年を機に開催された「未来をひらく 福澤諭吉展」においてもこの意味で紹介されていた。福澤諭吉による書幅の言葉は、中国の古典『周易』にある「観国之光、利用賓得于王」（国の光を観るは、王に賓たる利あり）に由来するとされ、この言葉はまた観光という語の源ともされている。

諭吉の次男で、時事新報の経営にあたった福澤捨次郎は、明治 26（1893）年、波沢栄一らとともに、海外からの賓客を遇するために貴賓会の創設に参加、幹事のひとりに名を連ねた。

英語名称を Welcom Society と称した貴賓会は、「我国山河風光の秀、美術工芸の妙、夙に海外の称賛する所となり万里来遊の紳士淑女は日に月に多きを加うるも之を待遇するの道備わらず」が故に、行楽の快樂、観光の便利を提供するのが目的で、綱領のひとつに「勝地・旧蹟・公私建設物・学校・庭園・製造工場等の観覧視察上の便宜を謀ること」を挙げている。欧化を急いだ時代でもあり、対象を来日する要人としてはいたが、貴賓会の文書は、観光の主たる目的が文化にあるという認識を映していた。

ちなみに、会長に選ばれた蜂須賀茂韶は明治維新後まもない時期にオックスフォード大学に留学した国際通であったが、彼が日本を発った 1872 年はジュール・ヴェルヌの『80 日間世界一周』（1873）の主人公がロンドンを出発し、旅行業の草分けトマス・クックが自ら世界一周の途についた年でもあった。

爾来 140 年、観光と文化との関わりは常に語られてきた。とはいえ観光は語源としての意味よりも、産業として、その振興をいかに図るかといったといった文脈で取り上げられる機会が多い。一昨年、観光庁が設立され、観光立国へ向けて国の体制整備がすすみ、予算も急増した。一方、ユネスコによる世界文化遺産の指定により、選定された文化遺産への観光客が急増した。今は遺産保全か観光開発かといった対立をこえたあらたな議論の枠組みが提起されている。都市再生の計画や実践からも、アーバン・ツーリズムの問題が重要視されてきている。また近年、オルタナティヴ・ツーリズムとしてさまざまな観光のあり方が論じられるようになった。さらに大学等における観光研究の進展も著しい。

いまこそ、この言葉が本来持っていた「光」、つまり優れた文化的な所産等

を、「観」、すなわち見る、示すという意味合いで観光を、さまざまな立場から再検討し、観光のリマスタリングをおこなうことが必要ではないであろうか。

このような企図から、本書でははじめに文化観光の概念やその理解の軌跡をたどり、つぎに文化観光の嚆矢としても論じられるグランドツアーの起源と展開を21世紀まで視野に入れて広く紹介している。最近世界の観光行動研究者が注目しはじめた日本における観光の様態と意識のアーキタイプを、都市と地域とを切り口にした論考をふまえ、将来につながる展望は宿泊施設経営者の立場から寄稿して頂いた。

北川宗忠氏は、『観光・旅の文化』(2002)をはじめ、わが国の観光文化について、多様な視点とテーマから非常に多くの論考や著作を発表されており、この分野の研究の先達であられる。小林麻衣子氏は、16世紀後半を中心に活動したスコットランド国王ジェイムズ6世の政治思想を博士論文のテーマとされ、近世スコットランド史を専攻されている。

新田太郎氏は、江戸東京博物館で、「東京流行生活」、「美しき日本 大正昭和の旅」などの企画展を担当、著書に『図説 東京流行生活』(共著)などがある。

星野佳路氏は、およそ20年前に軽井沢の星野温泉(現 星野リゾート)の代表取締役社長に就き、以後リゾートや温泉旅館再建でも活躍、政府の観光関連の委員会等でも積極的に発言されている。

内藤正人(副所長)は浮世絵研究の立場から、美山良夫は文化施設、アート・マネジメント研究の視座でそれぞれ執筆した。

なお、国内外とも観光に関する文献は、事例紹介、事例研究の占める割合が非常に多い。そのため本書に付した主要研究資料の紹介は、重複を避け観光の意味や構造を今日的な視野で考えるための文献に限っている。

本書のために多忙な時間をさいてご寄稿頂いた方々に心から感謝するとともに、本特集が、ささやかながら文化観光、あるいは観光に於ける文化的契機を検討する機会となればと願ってやまない。

慶應義塾大学アート・センター所長 美山良夫